

IV-242

昭和初期、郊外洋風住宅から読み取ることのできる外部空間構成手法に関する研究

野村総合研究所 正員 菅沼 祐一
 東京工業大学 正員 中村 良夫
 東京工業大学 正員 斎藤 潮

1、研究の背景

田園調布・成城といった昭和初期に開発された郊外住宅の研究が盛んである。実際に田園調布のような郊外住宅地を歩いてみると緑の豊富さ、敷地の大きさ等先行研究より得られる情報を追体験することができる。しかし、この様なやや抽象的な表現とは異なった郊外住宅特有のデザインの存在を住宅の玄関部、外囲い、門に私は見い出せる。郊外住宅の外観に見られるデザイン、すなわち、先人の用いた外部空間構成手法を細かく見ていくことは、今後の街路設計に当たって役に立つものと思われる。また、近年、建て替えが進み昭和戦前の住宅が消えつつあるという点では、郊外住宅の外部空間の構成ディテールを残して置くことは史的価値があると思われる。

2、研究の目的

本研究の目的は、昭和初期に建てられた住宅より外部空間のデザイン手法を抽出し、外部空間構成手法として整理することである。

3、研究の手順

本研究では現地調査をもとに昭和初期洋風住宅の外部空間デザインの構成要素を採集し、そこでみられる景観演出のための手法を読み取った（図-1）。対象地域は田園調布の北に位置する目黒・世田谷東部地区とした。また、本論で数値的に扱っているものは田園調布に隣接する奥沢地区で集計したものである。

4、各種景観要素についての考察

① 洋風住宅の類型

対象地域内に存在する郊外洋風住宅は、以下の4つの型に分けることができる。建物全部が洋風である「全館洋風型」、玄関並びに玄関横部分のみが洋風である「オモテ洋風型」、玄関は引き違い戸で和風であるが玄関横は洋風で応接間であったりする「和洋並存型」、建物全体は和風で統一されているが、玄関横の部屋の窓などに洋風の要素が加味された「和風付属型」、以上4つの型である。（表-1）に前者3つの型の絵をのせた。分類の基準は、洋風を採用した度合の大きさによる、各タイプの家ではどれも思い思いの材料・色が採用されており、隣の家との違いを作りだそうとしたことが見て取れる。

② 屋根

母屋と玄関横との屋根構造のマトリックスを作ってみると（表-2）となる。これより、母屋と玄関横とが同じ構造になっているものが非常に少ないことがわかる。ここからは、母屋と玄関横とを和風と洋風といった違いで出すだけでなく、和風のなかでも切妻であったり入母屋であったりと屋根形式を「違わせる」という手法が読み取れる。これによって、住宅に意匠的な厚みもたらされているといえよう。

表-2 母屋と玄関横の屋根構造の関係

		母屋			
		切妻	寄棟	入母屋	不明
玄関横	切妻	8	25	14	1
	寄棟 入母屋 その他	6	5	1	

* 数字は件数、計63件

表-3 玄関横の屋根瓦の種類

	玄関横	
	切妻	寄棟
* 計51件		
棧瓦	23	2
フランス瓦	14	
セメント瓦	9	
スレート	1	
トタン	1	1

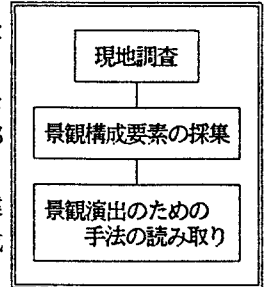
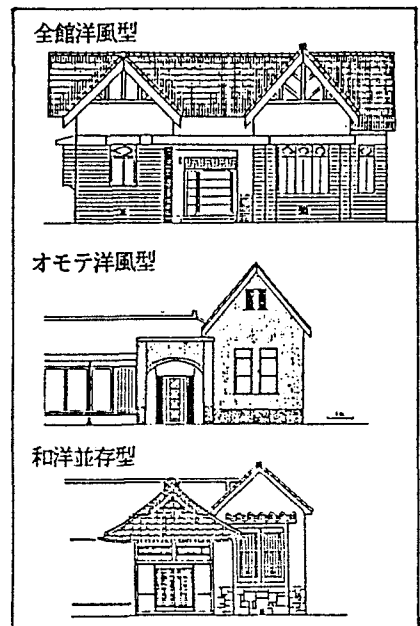


図-1 研究の手順

表-1 洋風住宅の類型



③、瓦

玄関横部分の屋根瓦を見てみると棧瓦、フランス瓦、セメント瓦、スレート、トタン等様々である。その割合は（表-3）の通りである。この中より、玄関横が切妻のもののみを取り出し、玄関横と母屋との瓦の取り合わせがどのようにになっているかをクロス表（表-4）にて見てみる。これより、様々な取り合わせがあることがわかる。

④ 門

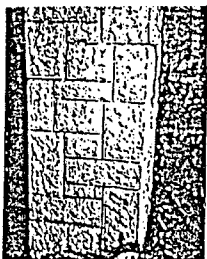
対象地区内には、主門に脇門がついている住宅が多数存在する（写-1）。現代の車社会の波に洗われて、主門が車庫の門と化している家もある。普段は閉じられ開かずの門であり日常生活では専ら脇門が使用されている家もある。脇門が常時使われている家の主門をみると、鉄製のものは錆が目立ち、木製のものは壊れかけているものが多い。このことから、古くは「儀式性」が高く「家の格式を表す1手段」であった主門が、車社会に適応し車庫の一部へと変化したこと、あるいは、商業主義優先の世の中で儀式性が失われつつあること、が読み取れる。また、門が道路より引き込まれていたり（写-2）、門前に段差が設けられてあったりする（写-3）、これら「門の引き込み」「門前の段差」は道路並びに道行く人との間に、「間(ま)をとる」という手法と読み直すこともできる。更に、門柱は大谷石の切り石乱層積み（写-4）でできている。門という部分に幾何的デザインが付加され、意匠的に厚みが増していることが読み取れる。また、門柱に表札、郵便受けを埋め込み、これらを一体的に施工するという工夫もみられる。以上のように門だけについてみても「主門と脇門の役割の変遷」「門の道路からの引き込み」「門前の段差」「門柱のデザイン」といった景観の見所が少なくとも4つは存在することがいえる。

⑤ 外囲い

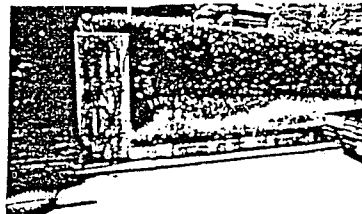
防災・景観上の観点から生垣が推奨されている。対象地域の住宅の生垣を見てみると（図-2）のように、上より生垣、盛土に芝生、そして低い石垣の3つの層から構成されている（写-5）。更に細かく見てみると生垣の家側には四つ目垣が組まれている。見方によっては、外囲いが盛土、生垣、四つ目垣という3つのもので構成されているともいえる。低い石垣は大谷石で積み上げられており、笠石も載せられている。ブロック塀のように単一の材料で構築されているのではなく、ここからは異種の材料を用いて組み合わせ、一体的に現出させるという「納まり」の手法が読み取れる。

5、結論

本研究では、昭和初期の郊外住宅から、「組み合わせる」「連わせる」「納まり」といった様々な景観の手法が読み取れることを示した。



写-4 切り石乱層積み

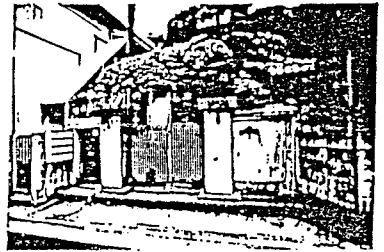


写-5 三層構造の外囲い

表-4
玄関横と母屋との瓦
との取り合わせ

*計43件

玄関横 が 切妻 の もの	棧瓦 フランス瓦 セメント瓦 スレート トタン	母屋				
		棧瓦			フランス瓦	
		切妻	寄棟	入母屋	切妻	寄棟
		2 5	4 9 4	2 7 3 1	1	3 1
			1			



写-1 脇門のある門



写-2 門の引き込み



写-3 門前の段差

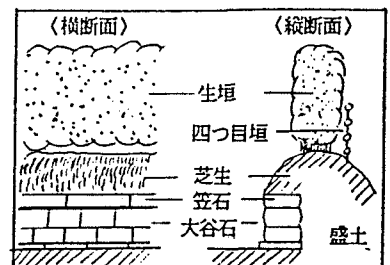


図-2 三層構造の外囲い